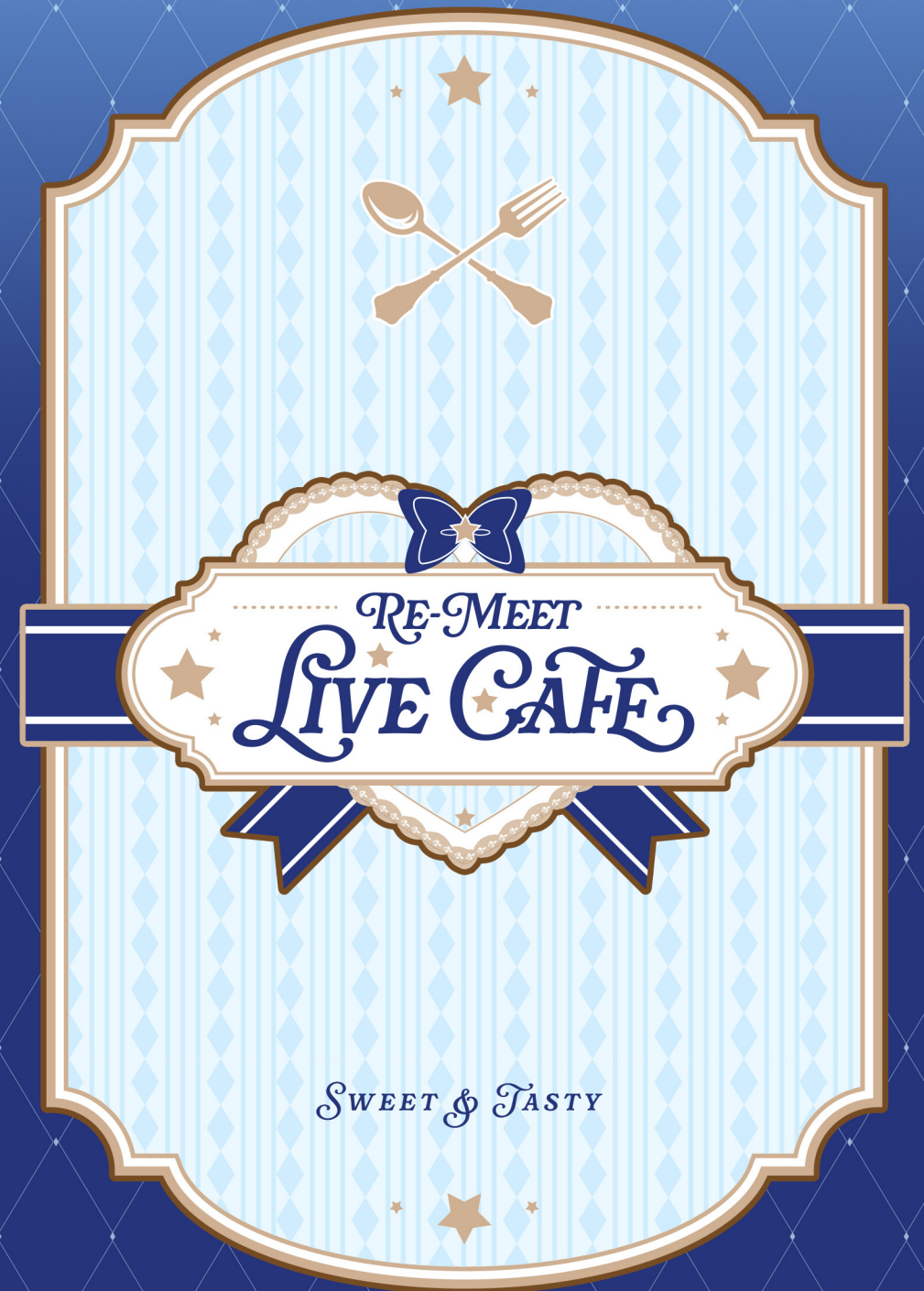


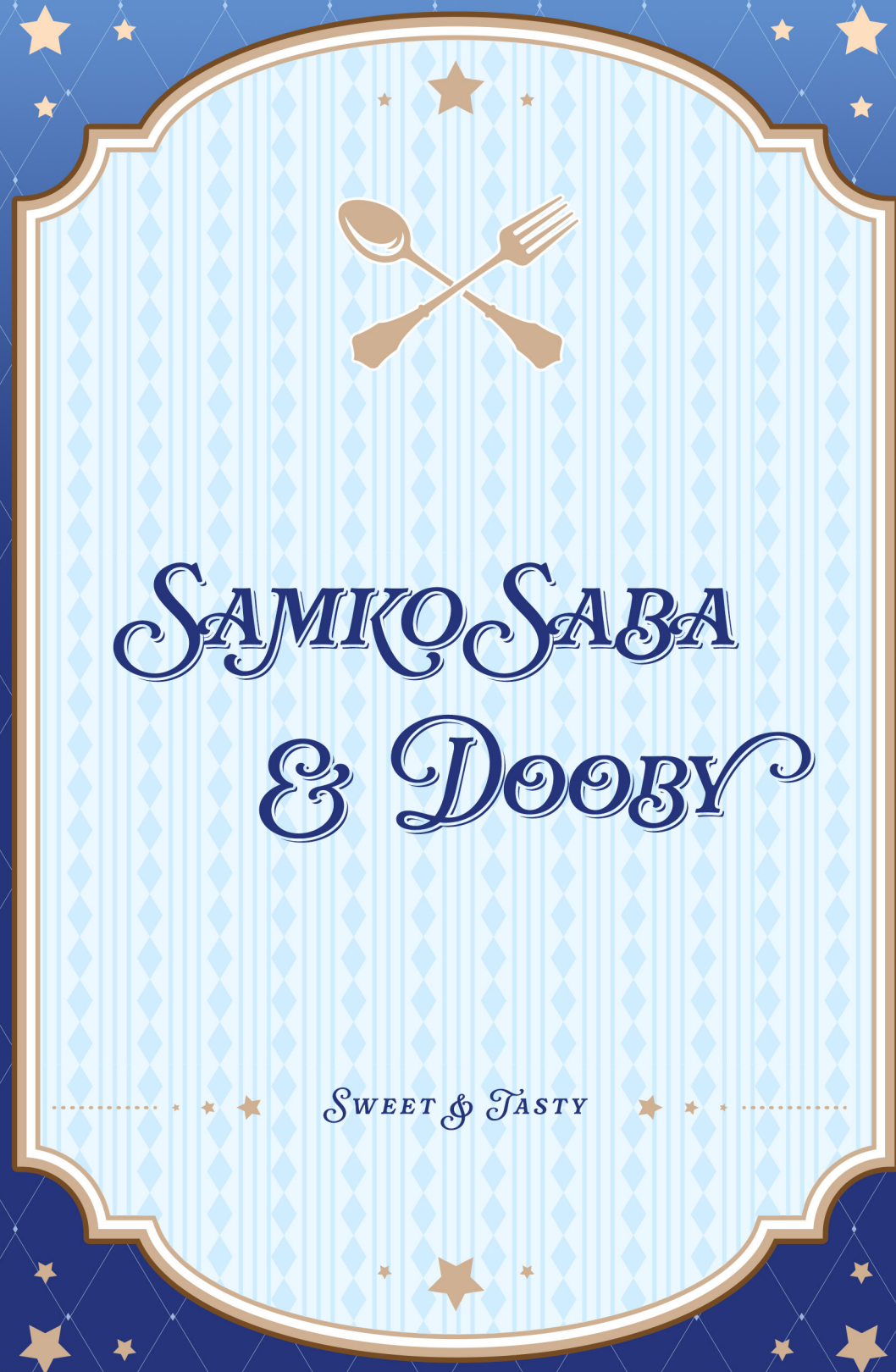
ADULT
R18
ONLY

RE-MEET
LIVE CAFE

2 0 2 6 S P R I N G S E A S O N



W A T E R R I N G A R T W O K





え? け...ケーキを先に
食べないんですか? ♡

店長...やっぱり
スケベですね...♡



今日はカフェの重要な「裸エプロンデー」.あ
なたが休憩室のドアを開けると,目に飛び込ん
できたのは,ポテトチップスの袋を手に,夢中で
漫画を読んでいるサボり中の「サメ」だった.

ん...(もぐもぐ),あ...店長さ
ん...一緒にポテチ食べます?

Sabaはポテトチップスを一枚口に入
れ,「カリッ」と軽快な音を立てた

わ...私はサボってなんか
ない!!これは仕事前の精
神統一なの,わかる? ♡

さらにあなたを悩ませたのは,Sabaがエプロ
ンの下で全裸ではなく,水着を着ていたことだ.
これは明らかに今日のルールに反している.

あなたはこの淫らな小サメの「火消し」を先にしてあげようと思った。さもないと今日の店の営業がままならない。あなたは秘蔵のマッサージ棒を取り出し、「微振動」モードに設定し、その秘裂に当てた。

ひどい
反則だよ

いやなも...
店長ひどい...お店にいつからこんなものが!?

突然の刺激にSabaは抑えきれず潮を吹いた

お水...お水が出ちゃった...!
店長の前で...Sabaのおまんこ...イっちゃった!!

Sabaの顔はオーガズムで赤く染まり、蜜穴は潮吹き後さらに多くの愛液を分泌し、絶えず外へと流れ出し、まるであなたに更なる接触を求めているかのようなだった。

オーガズムを迎えたばかりのSabaは、脳がショートしたのか、不意にあなたをソファに押し倒した。待ちきれない様子であなたのズボンを引き下ろし、すでに赤く膨れ上がった太い肉棒を取り出すと、顔を近づけ、ピンク色の柔らかい小さな舌先を伸ばした。

店長は、おっぱいだけじゃ物足りないんですよね...
だったら、こうしたら...

Sabaは舌で敏感な尿道口を優しくつつき、くるくると回す

ん...店長の先走り汁...しょっぱい...えっち...じゃあ、Sabaがいただきます...

Sabaは八重歯を見せ、小さなお口を開けて、あなたのそそり立つ巨根にゆっくりと迫っていく。

Sabaは濡れて赤くなった桜色の小さなお口を限界まで開き、ゆっくりと大きな亀頭を飲み込んでいく。口腔内に入ると、Sabaが頬で吸い付いてくるのを感じ、すぐに喉の奥に突き当たった。

んん…んぐっ…！店長の…おっきすぎて…喉の奥まで…で、でも…Sabaは…負けません…！

Sabaは口腔内を締め付け、上下に激しく吸い付き始める

Sabaのお口のおまんこ…気持ちいいですか、店長？…店長の先走り汁、すごい…

いきそうになったら…我慢なくていいですよ…私の口を…オナホールだと思って…

ずるずる

淫らな言葉を口にしながら、Sabaは頬の筋肉で肉棒を締め付け続け、柔らかい両手で口のリズムに合わせてあなたの根元を素早く扱っている。

んっ…！店長のちんちん…入ってきた…おっきい…うう…

Sabaがまだ口で文句を言っている最中、あなたは不意に肉棒をその二枚の陰唇の間に埋めました。巨大な亀頭が彼女の幾重にも重なった媚肉を押し広げ、ゆっくりとその温かく引き締まった膣道に押し入っていきます。

これじゃ生ハメじゃないですか…中の肉が…全部押し広げられちゃってる…

あなたの進入によってSabaの瞳孔が収縮し、息を呑む

やあ…見ないで…Sabaのまんこ…すごくえっちになっちゃってる…ぐちゅぐちゅって…店長のちんちんを食べてる…

すぽすぽ

あなたはSabaの体内で抽挿を始めます。引き抜くたびに大量の体液が持ち出され、キラキラと光る糸を引きます。Sabaは引き出される淫水を見つめ、恥ずかしそうに頬を赤らめました。



Sabaが絶頂に達して叫んだ瞬間、あなたも爆発の臨界点を感じました。あなたは彼女の両脚をさらに大きく開き、肉棒を彼女の花芯の奥深くにしっかりと押し当て、その熱い精液を次から次へと肉穴の中に噴射します。

また！
熱い店長の
ミルク！

また来た…！いっぱい…！直接子宮の上に入っちゃった……お腹が…店長のミルクでいっぱいになっちゃう…！

だめえ…頭がくらくらする…気持ちいい…店長…Sabaをめちゃくちゃにしてください…Sabaを…店長専用の肉便器に…してください…♥

射精が終わった後も、あなたの肉棒は肉穴の中に留まり、彼女の膣壁が絶頂後に痙攣する余韻を味わいます。Sabaは泥のようにぐったりとし、目は虚ろで、小腹は精液で満たされたために僅かに膨らんでいました。



「ぽっ」というくぐもった音と共に、あなたがSabaの泡立つ蜜穴からその熱い肉棒を引き抜くと、背後で突然「ガタン」という大きな音がした。慌てて振り返ると、Doobyが顔を真っ赤にして床にへたり込んでいるのが見えた。

うう…わ、私はケーキを取ったらすぐに行きます…店長が…そ、そんなえっちなことをするのを邪魔しませんから…どうか私を食べないでください…

Doobyは床から立ち上がろうとするが、両脚が砕けたように力が入らないことに気づく

あ…あれ…？た…立てない…どうして…？Doobyは悪いことしてないのに…どうして下の方が…こんなに熱くなるの…

グ
ル
グ
ル

彼女は無意識に脚を固く閉じるが、その熱い流れが脚の間から湧き出るのを止められず、布地を通して、透明な液体が床を濡らした。